漂流

訳　村松眞一
（静岡大学名誉教授）

台風が近づいていた。私は砕ける大波を見ようと、強風の中で防波堤に腰を下ろしていた。傍には天野甚助老人が座っていた。東南の方は、一面に墨を流したように暗く、海だけが異様な黄褐色をしていた。とてつもない大波が、もう聳えるようにして寄せて来ている。それは、１００ヤードほど先でドドッと地響きを立てて崩れ、泡を飛ばして波うち際一面を被いながら、顔まではねかかってくる。怒濤が砕ける長い響きのあと、その度に引いてゆく砂利の音は、ちょうど全速力で走る列車の轟音そっくりである。私は天野甚助に、見ていると怖くなると言った。すると彼はにやりと笑った。

「わたしはこれよりもっと荒れる海で、二日二晩泳いだです」と彼は言った。

「あの時わたしは19歳、８人乗り組んだなかで、助かったのはわたし一人です」

「わたしどもの船は福寿丸といって、船主はこの町の前田甚吾郎でした。乗り組んだ者は、一人のけると、みな焼津の者ばかり。船長は斎藤吉右衛門といって―60歳すぎの人、城之腰に住んでいて―このすぐ後ろの通りです。もう一人老人が乗っており、仁藤正七といい、新屋に住んでいました。それから42歳の寺尾勘吉、その弟で巳之助という16になる若者も一緒でした。寺尾の衆も新屋に住んでいました。それから30になる斎藤平吉。それに松四郎という人。周防の出で、焼津に住みついていました。鷲野乙吉というのがもう一人、城之腰に住んでいて、まだ21。わたしが船で一番下―寺尾巳之吉は別ですが。」

「わたしどもは申年の万延元年、7月10日の朝、焼津から讃岐へ向けて船を出しました。11日の夜、紀州沖で東南から吹き付ける暴風に見舞われたです。夜中少し前に船が転覆、ひっくりかえるなと思ったとき、私は板子を一枚つかみ、海へ放り出して、すぐ飛び込みました。その時は恐ろしく吹き荒れていました。夜は真っ暗で、2、3尺先しか見えません。しかし運よくあの板子を見つけ、それを抱えこむようにしました。次の瞬間、もう船は消えていました。わたしの近く、海の中にいたのは、鷲野乙吉と寺尾の兄弟と松四郎という男で、みんな泳いでいました。他の者は、影も形も見えません。たぶん船と一緒に沈んでしまったのでしょう。わたしら5人は、大波にもまれて漂う間、互いに呼びあっていました。それから気がつくと、寺尾勘吉だけ、ほかのみんなのように、板子か何か板材をもっていません。わたしは勘吉に向かってどなったです。『あにき、あんたには子供がある。おれはまだ若い―この板子をやろう。』すると勘吉がどなり返しました。『この海じゃ板子はあぶない―木をはなせ、甚よう、―怪我するぞ！』それに答えもしないうちに、黒い山のような大波が、わたしらの上にドッとかぶさってきました。わたしは長いこと波の下にいました。それでまた浮き上がってきたときには、勘吉の姿はどこにも見えませんでした。若い者たちは、まだ泳いでいました。が左手へ押し流されていました。お互いに大声で呼び合いました。わたしは波についていくようにつとめました。他の者たちはわたしに呼びかけます、「甚よう！甚よう！―こっちへこい―こっちへこい！」でもその方角へ行ったら、とても危ないことがわかっていました。と

申しますのは、波が横からぶつかるたびに、わたしはその下に引きこまれたからです。そこでわたしは呼び返してやりました。『潮について行け！流れについて行け！』けれど、連中にはわからなかったようです。それで、なおも呼んでいました。『こっちへこい！—こっちへこい！』—それから呼び声は、そのたびにだんだん遠ざかって行きました。わたしは怖くて返事ができなくなりました…溺れた者は、仲間が欲しいと、そんな風に呼びかけるものです、こっちへこい！—こっちへこい！」

「しばらくして、その呼び声は止みました。聞こえるのは、波と風と雨の音ばかり。あたりは真っ暗で、波は去っていくその時だけ見え、それが高い黒い影となって、恐ろしい力で引っぱります。その引っぱり方で、どっちへ向かえばよいか見当をつけました。雨が砕ける波を押さえてくれました—雨が降っていなかったら、そんな荒海に、誰だって長くは生きていられなかったでしょう。しかも刻々に風はひどくなり、波は高くなる一方です。—わたしは小川のお地蔵さまに、一晩中お助けを乞いました…明りですか？—ええ、水の中に光って見えました。多くはありません。大きなのが、蠟燭のように光っていました…」

「明け方、海はきたならしく見えました—あおい泥いろです。波は小山のようで、風は恐ろしい吹きようでした。雨としぶきが水面に霧となってけぶり、空との境は見えません。けれど、もし陸地が見えたとしても、そうして漂っているようにするしか、どうしようもなかったでしょう。わたしは腹が空いて—ひどく腹が空いてきました。やがてその苦しさは我慢できなくなりました。一日中わたしは大波にもまれ、風と雨にうたれて漂っていました。陸地は影すら見えません。わたしはどちらへ行っているのかわかりませんでした。あんな空の下では、西も東もわかったものではありません。」

「暗くなってから風が止みました。しかし雨はまだひどい降りで、あたりは真っ暗です。空き腹の苦しみはなくなりました。けれど体が弱って—すっかり弱りきって、わたしは沈んでしまうに違いないと思いました。そのとき、あの声がわたしを呼んでいるのが聞こえました—前夜わたしを呼んだ例の声です—『こっちへこい！—こっちへこい！』・・・すると不意に、福寿丸の４人の姿が見えました—泳いでいるのではなく、わたしのそばに立っているのです—寺尾勘吉と寺尾巳之助と鷲野乙吉と松四郎でした。みんな怒った顔をして、わたしを見ています。そして、子供の巳之助が叱るように叫びました。『ここでおれは舵を決めにゃならん。だのに、甚助、お前は寝てばっかりいて！』それから寺尾勘吉が—わたしが板子を渡そうとした男ですが—両手で掛物をもってかがみこみ、それを半分広げて申しました。『甚よう、これが阿弥陀さまの絵だ—見ろ、いまこそ念仏を唱えにゃいかん！』それは変な話し方で、何だか怖くなりました。わたしは阿弥陀さまのお姿を見ました。そして、すっかり恐ろしくなって念仏をくりかえしました—南無阿弥陀仏—南無阿弥陀仏！そのとたん、焼けるような痛みが腿とお尻を刺しました。それでわたしは、板子を放し海へころがりこんでいました。その痛みは、大きなカツオノエボシのせいでした。・・・カツオノエボシをごらんになったことはないでしょうね。エボシ、つまり神主が

かぶる帽子のような形をしたクラゲです。鰹がそれを餌にするので、わたしどもはカツオノエボシと呼んでいます。どこにでも、そいつが現れると、漁師は大漁を当てにします。体はガラスのようにすき通っています、がその下に紫色の縁飾りのようなものと、長い紫色の紐があります。その紐が触れると、痛みは大変なもので、長いこととれません……その痛みで、わたしはわれにかえりました。もし、クラゲに刺されなかったら、わたしはそのまま目が覚めなかったかもしれません。わたしはまた板子に乗って、小川の地蔵さまと金毘羅さまにお祈りしました。それで朝まで目を覚ましていることができました。

「夜が明ける前に雨は止み、空は晴れてきました。それは星が見えたからです。明け方に、またも、うとうととして、頭をぶたれてわたしは目が覚めました。大きな海鳥がぶつかったのでした。日が雲の向こうに昇りはじめ、波は穏やかになっていきます。やがて小さい茶色の鳥が顔をかすめました・・・海岸の鳥です（名は知りませんが）。それで陸地が見えるに違いないと思いました。後ろをふり返ると山が見えました。わたしは、その形に見覚えはありませんでした。青く見えて—9里か10里は離れているように思われました。わたしはその山の方へ、水を掻いて行こうと決めました。もっとも、岸に着く望みはほとんどありませんでしたが。わたしは、またもや腹がへってきました—恐ろしく腹が減って！」

「わたしは、何時間もその山の方に向かって水を掻いたです。もう一度うとうとっとしました。そしたらもう一度海鳥がぶつかりました。一日中水を掻きどおしでした。夕方近くになって、山の様子から、そちらの方へ近づいているのがわかりました。しかし、岸に着くには、二日もかかるだろうと思いました。ほとんど望みを失いかけたその時、ふと一隻の船—大きな帆船を見つけました。船は私の方へ向かってきます。でも、もっと早く泳がないと、その船はずっと向こうを通りすぎてしまうことがわかりました。助かる見込みは、もうこれが最後です。わたしは板子を捨てて、いっしょけんめい泳ぎました。船から2町ばかりのところへたどりつきますと、わたしは大声で叫びました。けれど甲板には誰も見えず、何の応答もありません。あっという間に、船は私の向こうを通りすぎてしまいました。日は沈みかけています。もうだめだと思いました。すると突然、一人の男が甲板に出てきて、わたしに向かって叫びました—『泳ぐんじゃない、からだをつかれさすな—今舟を下ろしてやるぞ。』それと同時に帆を下ろすのが見えました。わたしはうれしくてたまらず、もう元気百倍するようで、ぐんぐん泳いでいきました。それから船は小舟を下ろしました。小舟が近づいて来ると、一人の男が叫びました—『誰か他にいるか—何か落としたものはないのか。』わたしは答えました—『板子一枚だけ。』そのとたん、わたしは、すっかり力が抜けてしまいました。小舟にいる人たちが、わたしを引っぱり上げてくれるのは、わかりました。が口もきけず、体も動けず、目の前が真っ暗になりました。」

「しばらくして、またも、あの声が聞こえました。福寿丸に乗り組んだ人たちの声です。—『甚よう！甚よう！』それで、わたしはぞっとしました。する

と誰かがわたしをゆさぶって申しました。『おい！おい！そりゃゆめだ！』―で、気がつくと、わたしは、帆船のなかで、吊角灯（カンテラ）の下に寝ていました（もう夜になっていましたから）。そばには、見知らぬ年寄りが、一杯のごはんを手にもって、すわっておりました。『少し食べてみなよ』と、爺さんはたいそう優しく言いました。わたしは起き上がろうと思ったのですが、できません。すると爺さんは、自分で茶碗から食べさせてくれました。茶碗が空になると、わたしはもっと欲しいと言いました。が、爺さんは答えました―『今はいかん、まず眠ることだ。』爺さんが、誰かに向って言っているのが聞こえました―『わしが言うまで、もう何もやったらいかん。たくさん食わせたら死んでしまうからな。』わたしはまた眠りました。そして、その夜、さらに二度ごはん―やわらかに炊いた飯―を一度に小さい茶椀に一杯ずつもらいました。

「朝になると、だいぶ気分がよくなりました。ごはんをもってきてくれた爺さんがまたやって来て、わたしに色々聞きました。わたしどもの船が沈んだことや、わたしが海につかっていた時間のことを聞いて、爺さんはたいそう気の毒がりました。爺さんが言うのに、わたしは二日二晩に、25里以上漂流したのだそうで、『おまえの板子を探して、拾い上げておいた。たぶん、それをいつか、金毘羅さまに奉納したくなるだろう』と爺さんは申しました。わたしはお礼を述べましたが、それは、小川の地蔵さまに奉納したい、と答えました。わたしが、しょっちゅうお助けを祈ったのは、小川の地蔵さまでしたから。」

「その親切な年寄りは、帆船の船長で、また船主でした。播州の船で、紀州の九鬼の港に向っていました・・・クキという名前を書くと、「鬼」の字を入れます―だからそれは九つの鬼という意味ですが・・・船の人たちは、みな大変親切でした。船に引き上げられたとき、わたしはふんどしだけの丸裸で、その人たちは、わたしに着物をみつけてくれました。一人はわたしに下着をくれ、もう一人は上に着るものを、またもう一人は帯をくれました。幾人かの人は、わたしに手拭や草履もくれました。そして、みんなで集めて、6・7両にもなるお金を恵んでくれました。」

「九鬼に着くと―そこは変な名前でも、感じのよい、小さな土地ですが―船長がわたしを立派な宿屋に連れていってくれました。二、三日休養すると、わたしは再び元気になりました。それから、その地方を治めている方、あの時代に地頭と呼んでいた人が、わたしを呼びに寄こし、わたしの話を聞き、それを書きとめました。地頭は、焼津の地頭に、ことの次第を報告しなくてはならん。その後で、おまえを送り返す手だてを見つけよう、と言いました。しかし、わたしを救ってくれた船長は、自分の船でわたしを家へ送り帰し、地頭の使者の役を果たしたいと申し出ました。それから二人の間にかなり議論がありました。当時は電報も郵便もありません。九鬼から焼津まで特別の使者を送ったら、少なくとも50両はかかったでしょう。ですが一方、こんな問題には特別な法律や習慣があり、法律といっても、今日のものとは大分違ったものでした。そうこうするうち、焼津の船が、近くの荒坂の港に入って来ました。そして、九鬼の女で、たまたま荒坂にいた者が、焼津の船長に、わたしが九鬼にいることを話

しました。そこで、焼津の船が九鬼へやって来ました。それで地頭は、焼津の船長にわたしを預けて、実家へ送り帰すことを決め、この船長に令状を渡しました。」

「結局、わたしが焼津に帰ったのは、福寿丸が沈んだときから、およそ一か月たってからでした。わたしどもは夜、焼津の港に着きました。それで、わたしは、そのまますぐ家には帰りませんでした。帰れば家の者をびっくりさせたでしょうに。福寿丸が沈んだという確かな知らせは、そのころ焼津に届いていませんでしたが、船についていた物が、いくつか漁船に拾い上げられておりました。それに暴風が突然やってきて、ひどく大荒れの海でしたから、福寿丸は沈んで、わたしどもはみな溺れ死んだものと信じられていました・・・他の者は誰一人消息はありませんでした……わたしはその夜、友だちの家へ行きました。そして朝になり、わたしの親と兄弟に知らせてやりました。そこで家の者がわたしを迎えに来てくれました……」

「毎年一度、わたしは讃岐の金毘羅さまへお参りに行きます。難船して助かった者は、みんなあそこへお礼参りに行きます。それにわたしは、たびたび小川の地蔵さまへお参りします。あしたそこへ、いっしょにお出でくだされば、あの板子をお見せしますよ。」